

一心寺かわら版

第三十五号 平成二十七年九月発行

ホームページ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索を

シリーズ・葬儀を考える①「起源」

昨今、終活といって健在なうちに自らの人生を総括しておこうとする動きが出てきています。誰もが死を避けて通れないのですから、死を含めて人生を見つめ直すのは自然なことです。もちろん葬儀を含めることなのですが、それを宗教的な観点から見つめ直すことはなかなかできていないようです。現在、葬儀の約九割が仏式だそうです。私も昨年、父の葬儀で初めて当事者となり、色々と考えさせられました。そこで仏教として、浄土真宗として、一人の人間として葬儀をどのように考えていくのか、シリーズで掲載していきたいと思えます。初回はその起源についてです。

イラクにあるシャニダール洞窟で

約6万年前のネアンデルタール人の骨が発見されました。その埋葬場所から周辺には無い花粉が見付かったことから、彼らは仲間の死を悼んで遺体を花で飾ったと推定されています。(↓)つまり、ネアンデルタール人は死者を弔っていたのです。これが現在世界で見つかっている最も古い葬送だと言われています。もちろん、それ以前にも葬儀や埋葬のようなことが存在していたと考えるのが自然でしょうか



(群馬県自然史博物館)

ら、人間が誕生して以来ずっと葬儀は行われ続けてきたと言えるかもしれません。現代でも、お葬式ではたくさんのお花を飾り、お棺にも白菊などの花々を入れて見送ります。死を悲しみ、去りゆく人との別れに花を添える、その心は人類誕生以来変わらないものかもしれません。

では大昔の葬儀、埋葬とはどのようなものだったのでしょうか。

日本においても縄文時代にはすでに埋葬は行われていました。ただし、この

頃の埋葬は身分の高い人々に限られたものであり、庶民の間に葬儀のようなものがあつたのかどうかは分かっていません。この頃は屈葬といって手足を折り曲げて埋葬されました。縄文時代の死者には大きな石が乗せられていたり、縛られていたりするものが見られるそうです。やがて弥生時代になると伸身葬が一般化します。大陸文化が持ち込まれ、埋葬方法にも影響を与えたのではないかと考えられています。縄文時代は移住生活が多かったため死者の多くはその場に置き去りにされました。しかし、弥生時代になり農耕が始まったことで人々が定住生活を始めるようになると、死者はお墓に埋葬されるようになりました。この頃には庶民の間にも埋葬の風習は一般的になっていたと考えられます。ただし、埋葬の際に葬儀のようなことがあつたのかどうかは不明です。

日本で最初に葬儀が記録として出てくるのは、七十二年に編纂された古事記において、日本神話に登場する神・アメノワカヒコ(天日子、天稚彦)が亡くなった際のことです。「そこに葬式の家を作って、ガンを死人の食物を持つ役とし、サギを箒を持つ役と



し、カワセミを御料理人とし、スズメを碓をつく女とし、キジを泣く女の役として、かように定めて八日八晩というもの歌い舞いで遊びました」とあります。この葬式の家とは「もがり屋」（もがりの宮）といい、一定期間「もがり」が行われた時代がありました。

「もがり」は、死者を蘇生させる「魂呼び」の期間とも、遺族が日常の空間から離れて喪に服す期間だったとも言われています。

家族は悲しみ涙に暮れ、掃除をする人、食事を作る人、お供えをする人がおり、人々が集い歌い舞う。このような光景は今の葬送とあまり変わらないように思います。

日本に入ってきた大陸文化は儒教の影響が強かったため、日本でも弥生時代以降は土葬が一般的になりました。儒教では火葬は遺体を陵辱するものだという考えがあるそうです。仏教の伝来とともに火葬の風習も入って来て、平安時代に貴族など高貴な身分の間では火葬が徐々に多くなってきます。鎌倉時代以降は庶民の間にも火葬が普及し始めましたが、江戸時代になるまでは仏教徒でも土葬が主流となっていました。

庶民に葬儀の風習が定着したのは鎌倉時代だと言われています。これは鎌倉仏教の影響が大きいと考えられます。浄土宗や浄土真宗などの鎌倉仏教が庶民に定着したことで死に対する人々の考え方にも変化が生じ、葬儀が一般化して行きました。

埋葬方法、葬儀の形は別として、なぜ人は古来より死者を弔ってきたのでしょうか。近親者が亡くなって自然と溢れ出る感情。帰って来てほしいと願う、けれどももう帰って来ないという悲しみ、それが最も大きな理由でしょう。もう一つは、今もご遺族へ「ご冥福をお祈りします」と言葉をかけることがあるように、死後の幸福を願う心が込められているでしょう。また、縄文時代、死者に石を

乗せたのはその霊を恐れたためと言われており、これも一つの理由だと考えられます。現在のお墓でも、お骨を納めた上に石が置かれます。今はそういう意味で置いているのではないでしょうが、その昔、死者に対して恐れを抱き、けがれていると考えていたことがあったのは事実だと思います。それが祓（はらえ、はらい）や慰霊、鎮魂へとつながっていきます。ある辞書には、「慰霊」とは死者をなぐさめること。「慰める」とはさびしさ・悲しみ・苦しみなどをまぎらせて、心をやわらげ楽しませる、とあります。「鎮魂」は、「たましずめ」と読んで、神道において生者の魂を体に鎮める儀式を指すものであったのが、今は慰霊とほぼ同様の意味で使われている、とありました。つまり、悲しみ苦しみをもって人生を終えた方を慰める。怨みを持った死者の魂を慰め、害をなすことのないように鎮めるというものです。平将門や菅原道真がその怨みから祟りをなすとして恐れられ、鎮魂のために神社が建てられていることは有名です。死をけがれと考えるのも含めて、それが日本古来の考え方であったとしても、葬儀、埋葬の意味の一つとなっては悲しいことでしょうか。では仏教において葬儀はどのように考えられていたのでしょうか。それは次回に。

眞宗興正派西讃教区仏教講演会報告

五月十四日、仏教講演会が開催されました。ご講師は結城思聞（松倉悦郎）氏（本願寺派善教寺住職・元フジテレビアナウンサー）、演題は「いのち・生命（いのち）・無量（いのち）」。アナウンサー時代の経験を交えながらのお話し、その中で特に感銘を受けたのは以下のことでした。



早稲田大学、フジテレビのアナウンサーと何十年も松倉さんと同じ道を歩んできた逸見政孝さん。早いものでもう亡くなってから二十年以上が過ぎました。固い友情で結ばれ、なんでも話し合える間柄だったので、逸見さんがどうしても直接言えなかったのが、自分の病気のこと。それをテレビ番組で告白したのを聞いて、すぐに電話されたそうです。その後、何度かの大手術。体力はどんどん落ちて行き、臨終が近づいてきました。松倉さんは、その臨終から通夜葬儀まで三日間付き添われました。その中から「いのち」について考えさせられたそうです。

十数時間に及ぶ手術のあと目が覚めた時のお話。逸見さんはただ自然に起きたと思っていました。家族から、先生が「逸見さん、終わりましたよ」と何度何度も声をかけてくれて、それに応えて「はい」と起きたんだよ、と教えられたといいます。その話を聞いた松倉さんは、「お念仏も同じではないか。阿弥陀さまの呼び声に応えるのがお念仏なのだ」と初めて得心したそうです。南無阿弥陀仏は阿弥陀さまからのお浄土への呼び声。だからそれに「はい、南無阿弥陀仏」と応えるだけでよいのです。

逸見さんからの最後の手紙を見せてくださり、「彼は字が綺麗でしよう」と言って静かに読み上げてくださいました。「来年、生きていれば出席します」という松倉さんたち同窓生への言葉に万感の思いを感じられたそうです。浄土真宗は俱会一処（くえいっしよ）、阿弥陀さまのお浄土に往生したものは、仏・菩薩たちと一つのところで出会うことができるのです、と語られました。

もう一つは、司会をされていた小川宏ショーでのお話。視聴者から詩を募って作曲家が曲を作り、プロの歌手が歌うというコーナーがありました。ある時、やっちゃんという脳性麻痺の障害を持つたお子さんに出会います。話ができないから先生に目配せで合図をして詩を作りました。

「ごめんなさいね、おかあさん。ごめんなさいね、おかあさん。僕が生まれてごめんなさい。僕を背負うかあさんの細いうなじに僕が言う。僕さえ生まれなかったらかあさんの白髪もなかったらうね。大きくなつたこの僕を背負って歩く悲しさも、傍らを誰もが振り返る冷たい視線に泣くことも。僕さえ生まれなかったら」。

この詩を読んだお母さんはその場に立ち尽くしました。一言だけ「やっちゃんがこれを？」と先生に問いかけました。すると今度はお母さんが「わたしの息子よ」というやっちゃんに呼びかける詩を作りました。「わたしの息子よ、許してね。このかあさんを許しておくれ。お前が脳性麻痺と知った時、ああごめんなさいと泣きました。いっぱいいっぱい泣きました。いつまでたっても歩けない。お前を背負って歩く時、肩に食い込む重さより、歩きたかろうねと母心。重くはない、と聞いているあなたの心が切なくて、私の息子よありがとう。ありがとう、息子よ。あなたの姿を見守っておかあさんは生きてゆく。悲しいまでのがんばりと人をいたわる微笑みの、その笑顔で生きている。脳性麻痺の我が息子。そこにあなたがいる限り」。

今度は、お母さんの心をしっかりと受け止めたかのようにやっちゃん後半の詩を作ったのです。



「ありがとう、おかあさん。ありがとう、おかあさん。おかあさんがいる限り生きていくのです。脳性麻痺を生きていく。優しさこそが大切で、悲しさこそが美しい。そんな人の生き方を生き方を教えてくれたおかあさん。おかあさん、あなたがそこにいる限り」。

この詩を書いた二ヶ月後に十五歳でやっちゃんはお浄土へと行ってしまいました。障害を持つ人が「ごめんなさい」と言わなくていい社会、誰もが「ありがとう」と生き抜いていける社会を作っていくのが私たちの務めです、と力強く語られました。

「共生」という言葉は「ともいき」という仏教の教えです。ジャータカ物語に、傷ついた鳩と鷲と王さま(釈尊の前世)のお話があります。言わんとするところは、それぞれかけがえのない同じ重さの「いのち」を生きているということです。私の役に立つ、立たないでいのちを見ることは、いのちを道具にしていることです。

すべてにいのちの尊厳を見出していくのが仏教。親鸞聖人のご和讃に「平等心をうるときを、一子地となづけたり、一子地は仏性なり、安養にいたりてさとるべし」とあります。「いのち」は平等であり、阿弥陀さまはあらゆる人を一人子のように憐れんでおられる。如来のお心は「仏性」。「仏性」とはあらゆる人が如来になれる可能性があるということなのです、と聞かせていただきました。

春季永代経報告

三月二十六日、春季永代経。法話は約十年ぶりに橋本朗仁師(坂出市・光耀寺)。事故で体が少し不自由になられたとのこと、それをご縁としてより一層、仏法が身に染みておられるご様子でした。仏の慈悲、言葉にすると簡単で



すが、この私を救うことがいかに大変なことか、そのはたらきの大さに頭が下がっておられる姿にこちらが頭が下がる思いでした。

よるしるべ二〇一五が開催されます

今年も一心寺が「よるしるべ」の会場になります。

十月三十日(金)〜十一月八日(日)(四日はお休み)

十八:〇〇〜二二:〇〇 詳しくは「よるしるべ」で検索。



十一月三日には昨年好評を博した「声明と雅楽のしらべ」今宵はお寺でよるしらべ」がございます。こちらもどうぞ。

